

こころ

課題図書「海を見た日」に描かれる発達障害と個性と多国籍と

原題は、「The Echo Park Castaways」で、作者のM・G・ヘネシーは、アメリカの作家です。邦題「海を見た日」は、上記の直訳ではありません。なぜ「海を見た日」なのかは、読んでのお楽しみ。

「The Echo Park Castaways」の直訳は「エコーパーク（地名）の見捨てられた人たち」。

Echo は、エコーとそのまま日本語表記しても意味が通じるように、こだま、反響、共感という意味もあります。ここでは固有名詞ですが意味深。Castaway は、後書きでは漂流者と訳しています。

作品は、エコーパーク（治安のよくない移民の多い貧困地区）に住む里親ミセス・Kに預けられた4人の子どもたちが、ある土曜の朝、冒険に出発する物語。

里親とは、「さまざまな事情で家族と離れて暮らす子どもを、自分の家庭に迎え入れ、温かい愛情と正しい理解を持って養育すること」と厚生労働省は説明しています。アメリカでは、日本の里親制度に当たるのが、フォスターケア制度。日本において里親で生活する100倍の子が、この制度の下で養育されているそうです。養育される子は、この作品の人物たちもそうですが、多国籍。

あらすじを書くとなタバレになるので、登場人物の個性について少しだけ紹介します。

まず、里親ミセス・K。ちょっと養育者としては不適格かなという人物。子どもたちには無関心で、日本の里親の定義「温かい愛情と正しい理解」からは、かけ離れている感じのロシア人。

クエンティンは、新入り。アスペルガー症候群（発達障害で、現在はASDに分類）のある子として登場します。特徴としては、うまくコミュニケーションがとれず、他者に関心が持てなかったり、こだわりが強く変化に柔軟に対応できず混乱したりします。

ヴィクは、薬を飲まない和不注意や多動を有するADHDの特徴を随所に示します。妄想癖がある人物としても描かれています。

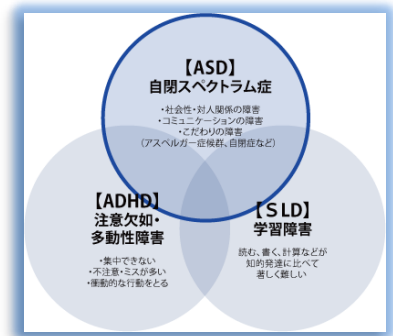
ナヴェイアは、医大に行きたいと願う女の子。他の子の世話をしながらドライに割り切る性格の持ち主。精神的に不安定な面も。

マーラは、無口なラテンアメリカ系の女の子。場面緘黙、自閉傾向かなと、読めます。

私は、物語の最後でミセス・Kの思いに感動。5人の絆にきらきら光る「海」が見えました。

なお、今年の夏の課題図書は以下のとおりです。この6冊、私はこの夏に一気読みしました。初めて読む作者ばかりでしたが、どれもおもしろく新たな世界を知る喜びがありました。

図書館に入っていますので、これからでも借りて是非読んでください。 ☆私のミニ紹介文☆



セカイを科学せよ！ 安田夏菜著 講談社

協力し合い困難な課題に挑戦！痛快ストーリー

海を見た日 M・G・ヘネシー/作 鈴木出版 杉田七重/訳

発達障害と個性、こころの通い合いを読み解く

江戸のジャーナリスト葛飾北斎 千野境子著 国土社

地道な調査と新発見資料、北斎の真実に迫る

その扉をたたく音 瀬尾まいこ著 集英社

人との出会いが今と未来を変えていく、泣ける感動長編

建築家になりたい君へ 隈研吾著 河出書房新社

進路を考える適書、現在と未来を考えさせられる

クジラの骨と僕らの未来 中村玄著 理論社

趣味とこだわりの世界から学びと未来を見つめる好書